



**Data**

監督・製作・脚本: スパイク・リー  
 原作: ロン・ストールワース『ブラック・クランズマン』  
 出演: ジョン・デヴィッド・ワシントン/アダム・ドライバー/  
 トファー・グレイス/コーリー・ホーキンス/ローラ・ハリアー/ライアン・エグゴールド/ヤスベル・ペーコネン/ポール・ウォルター・ハウザー

## 👁️👁️ みどころ

黒人差別問題に剛速球でメスを入れた『マルコムX』(92年)はスパイク・リー監督の最高傑作で、主演したデンゼル・ワシントンの代表作。それから四半世紀を経た今、同監督が同俳優の息子ジョン・デビッド・ワシントンを用いて、再び黒人差別問題に挑戦！

本作は黒人警官が白人至上主義を掲げる秘密結社KKKに潜入するというとんでもない物語だが、本作はカーブともフォークとも考えられる変化球で眩惑・・・？近時『たちあがる女』(18年)等の「双子もの」や『キングダム』(19年)等の「そっくりさんもの」が相次いでいるが、本作は黒人警官と白人警官が二人で一人前になってKKKに潜入するもの。声は黒人警官の、姿・行動は白人警官の担当だが、ホントにそんなことが可能なの？

誰でもそう思うし、うまくいきすぎの感もあるが、本作はれっきとした現実の体験に基づくものだ。アカデミー賞脚色賞を受賞した面白さを楽しみながら、他方では冒頭の『風と共に去りぬ』(39年)や中盤の『国民の創世』(15年)のワンシーン、そしてラストの「逆さの星条旗」のシーンの意味をしっかりと考えたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□ 『万引き家族』の対抗馬が公開！こりゃ必見！■□

2018年の第71回カンヌ国際映画祭ではパルムドール賞を受賞した是枝裕和監督の『万引き家族』(18年)が絶賛された(『シネマ42』10頁)。その次点となるグランプリを受賞したのが、スパイク・リー監督の問題提起作である本作だ。スパイク・リー監督作品

には『インサイドマン』(06年)、『シネマ11』65頁)、『セント・アンナの奇跡』(08年)、『シネマ23』88頁)、『オールドボーイ』(13年)、『シネマ33』158頁)等があり、私の大好きな監督の一人だが、何と言っても衝撃だったのは、『マルコムX』(92年)。私はそれまで“マルコムX”なる人物を全く知らなかったこともあり、同作を観た時の衝撃は大きかった。

黒人差別の根強いアメリカにはKKK(Ku Klux Klan)があることを、私はいろいろな映画を観て知っているが、パンフレットによれば、それは次のとおりだ。

**Ku Klux Klan** (クー・クラックス・クラン) は白人至上主義を掲げるアメリカの秘密結社。黒人、アジア人、ヒスパニック系など他人種に対しての市民権に異を唱え続け、白装束で頭部を覆う三角頭巾をかぶりデモ活動を行う。時に犯罪行為にも手を染める過激な思想を持つ者も所属する。

本作は何と黒人刑事のロン・ストールワース(ジョン・デヴィッド・ワシントン)がそのKKKに潜入捜査をするというもの。少し前に試写の案内を貰った時は、「いくら何でもそんな馬鹿な!」と思ったが、どうもこれは本当らしい。つまり、本作は現実にもコロラド・スプリングズの警察署で初めてのアフリカ系アメリカ人の刑事になり、さまざまな任務を遂行したロン・ストールワースの体験をつづった回想録を原作とした映画らしい。しかも、本作は第91回アカデミー賞で6部門にノミネートされ、結果として脚色賞を受賞している映画だから、こりゃ必見!

## ■□■あの名優の二代目の出来は?監督との相性は?■□■

私が中学生時代にはじめて知ったハリウッドの有名黒人俳優はシドニィ・ポワチエ。たしか高1の時に観た『いつも心に太陽を』(66年)では、彼の演技と「To Sir with Love」の主題歌にホレ込み、乏しいお小遣いの中からSPレコードを買って、その曲を覚えたものだ。続いてお馴染みになったのは、デンゼル・ワシントン。『グローリー』(89年)でのトリップ二等兵役や『戦火の勇氣』(96年)でのナサニエル・サーリング中佐役はハマり役だったし、『ペリカン文書』(93年)、『名作映画から学ぶ裁判員制度』72頁)、『マーシャル・ロー』(98年)、『ボーン・コレクター』(99年)もすべて彼の名演が光っていた。さらに、『ザ・ハリケーン』(99年)、『シネマ1』41頁)も、『トレーニング デイ』(01年)、『シネマ1』14頁)も面白い映画だった。

デンゼル・ワシントンは、私が見た映画だけでも、『ジョンQ—最後の決断—』(02年)、『シネマ2』137頁)、『アントワン・フィッシャー きみの帰る場所』(02年)、『シネマ3』146頁)、『タイムリミット』(03年)、『シネマ4』101頁)、『マイ・ボディガード』(04年)、『シネマ7』64頁)、『インサイド・マン』(06年)、『シネマ11』65頁)、『デジャヴ』(06年)、『シネマ14』231頁)、『サブウェイ123 激突』(09年)、『シネマ23』未掲載)、『ザ・ウォーカー』(10年)、『シネマ24』76頁)、『アンストッパブル』(10年)、『シネマ

26』未掲載)、『デンジャラス・ラン』(12年)、『シネマ 29』166頁)、『フライト』(12年)、『シネマ 30』25頁)、『イコライザー』(14年)、『シネマ 33』未掲載)、『マグニフィセント・セブン』(16年)、『シネマ 39』296頁)、等に出演し、いずれも素晴らしい演技を見せてきた。

スパイク・リー監督が『マルコムX』の主役に起用したのはそのデンゼル・ワシントンだが、何と同監督は本作の主役ロンに、その息子のジョン・デヴィッド・ワシントンを起用したからビックリ! さあ、あの名優の二代目の出来は?

また『マルコムX』ではスパイク・リー監督とデンゼル・ワシントンとの相性は抜群だったが、本作に見るスパイク・リー監督とジョン・デヴィッド・ワシントンとの相性は?

### ■□■初の黒人警官が誕生! 初の潜入捜査の大役は如何に? ■□■

本作導入部は、「警官募集」の看板を見てコロラド州コロラド・スプリングズ警察に応募し採用されるロンの姿が描かれるが、面接時のロンの受け答えを見ていると、今時の若者としては立派なもの。「ニガーと差別されても我慢できるか?」の質問にも「必要であれば・・・」と答えていたから偉い。しかし採用後は、事件捜査を希望したにもかかわらず書類管理担当の記録室に配属され、日々の書類の出し入れ作業にウンザリしていた彼は、極端な黒人差別者の先輩と衝突しそうになったから、ああ、やっぱりダメ・・・?

そう思ったが、何の何の! ロンは大胆にも所長に面会を求め、潜入捜査員になりたいと申し出たから、偉いというより、こりゃハチャメチャだ。もちろん所長がそんな申し入れを、そのまま聞き入れるはずはなかったが、よく考えてみれば「黒人英語」と「白人英語」を完璧に使い分けることができると自信を持って語っていたロンは、世間を騒がせているブラックパンサー党への潜入捜査にぴったり。そう考えた所長は翌日、手の平を返したように、ロンにブラックパンサー党の集会に出向く任務を与えることに。その最初の任務は、「差別と闘え!」と黒人の決起を促す、黒人解放運動の闘士クワメ・トゥーレ(コーリー・ホーキンス)の演説会に参加(潜入)し、彼の演説と会場の雰囲気マイクに録音することだ。さあ、ロンはその任務をいかに遂行するの?

デンゼル・ワシントンは若い時から洪い目の演技が光っていたが、二代目のジョン・デヴィッド・ワシントンはわりと陽気目。彼が演じるロンの任務自体は命がけのシリアスなものだが、演説会の列に並んでいた女性パトリス・デュマス(ローラ・ハリアー)にお気軽に声を掛ける姿はナンパ調だ。もっとも、そのパトリスはブラックパンサー党の幹部だったから、ホントはちょっとヤバイはずだが・・・。

### ■□■黒人警官がKKKに加入申込み? そんなバカな! ? ■□■

スパイク・リー監督は映画の中の節目節目に面白い見せ場をつくるのが実にうまい。ブラックパンサー党の集会に隠しマイクをつけて潜入した(はずの)ロンは、一方では職務

に励みながら、他方では「差別と闘え！」と熱く語るクワメの演説に感動。さらに任務のために近づいたはずのパトリスにもある種の魅力を感じてしまったから面白い。その結果、ロンが公私混同気味に(?) 集会後パトリスをバーに誘うと、意外にパトリスはOKしたからロンは大喜び。しかし、店で待っていたロンの前に白人警官から嫌がらせを受けたため、浮かない顔をしたパトリスが現れると、ロンは複雑な思いに駆られることに……。

ロンの潜入捜査の結果、ブラックパンサー党の集会では、「演説を含め危険な発言はあったものの事件性なしと判断できたのは大きな成果。その結果、ロンの任務は解かれたうえ、次の仕事は情報部になれたからロンは大喜びだ。新しい机の上で広げた新聞でクー・クラックス・クランの文字と電話番号を見たロンがすぐにダイヤルを回すと、KKKコロラド・スプリングズ支部につながったものの、留守番電話に。しかし、そこで彼が自分の名前とKKKに興味があることを残すと、間もなく電話が入り、ウォルター・ブリーチウェイ(ライアン・エッゴールド)と名乗る男が話をするように促してきた。そこでロンは、白人以外の人種すべてを嫌っていることを前置きに、妹が黒人にナンパされたホラ話を下劣極まりない言葉でまくしたてると、ウォルターからいたく気に入られ、そのまま会う約束を取り付けてしまったから、ビックリ。まさか、ホントに黒人警官のロンが、KKKのウォルターに会いに行くの？

## ■■■白黒警官二人で一人前！なるほどこんな潜入も！■■■

3月21日に観た『たちあがる女』(18年)はコーラス部の講師という“表の顔”と環境活動家(でテロリスト?)という“ウラの顔”を持つ中年おばさんが主人公だったうえ、彼女とは性格が正反対の平和主義者の双子の姉がいたことが、最後のあつと驚く展開の伏線になっていた。また、秦の始皇帝を描いた人気漫画『キングダム』を映画化した邦画の『キングダム』(18年)では、黒澤明監督の『影武者』(80年)と同じ“そっくりさん”が面白い導入部を形作っていた。また、『アラン・ドロンのプロ』(74年)やレオナルド・ディカプリオが一人二役で主演した『仮面の男』(98年)は“双子モノ”のトリックが売りの面白い映画だった。

それらに対して、本作は黒人警官ロンと白人警官フィリップ・ジーマー(アダム・ドライバー)の2人が一人前でKKKへの潜入を行うというものだ。前述の電話を受けたKKKコロラド・スプリングズ支部のウォルターは、ロンの声だけで「この男はKKKの会員にふさわしい！」と評価してくれた上、「会いたい」と彼の方から言ってきたのだから、話しを前に進めるべきは当然。しかし、いくらなんでも黒人のロンがウォルターに会ってKKKに入ることはできないから、ロンは声(電話)だけの役割とし、二人で一人前の潜入捜査を行う相棒にフィリップを指名したわけだ。つまり、白人警官のフィリップはその姿を見せて現実にKKKの中に入って行動するわけだが、そこで最低限必要なことは声やしやべり方を電話のロンとそっくりにすること。

現在中国語検定2級の試験勉強に向けて努力を続けている私には、そんなことは到底不可能に思えるが、映画は何でもありだから、それくらいのことはロンのフィリップに対する特訓(?)で何とか乗り切ることができたらいい。「電話の声と違うな?」と言われたって、「ちょっとかぜ気味で・・・」とごまかせば何とかなるさ!さらに、ロンは黒人英語と白人英語の使い分けが完璧にできるそうだが、2、3日の特訓だけでフィリップがそれをマスターするのは到底ムリ。そんな不安はあったが、映画だから「当たって砕けろ」でOKだ!準備万端とは言えないままフィリップはKKKの中に入り込みアイヴァンホー(ポール・ウォルター・ハウザー)たちと交流を深めていったが、組織の中で最も過激な構成員フェリックス(ヤスベル・ペーコネン)だけはフィリップの正体を疑っているようだから、ちょっとヤバイが・・・。

## ■黒人差別をいかに問う?あの映画、この映画に注目!■

本作冒頭は、『風と共に去りぬ』(39年)で観た、陥落したアトランタの広場に横たわる大勢の負傷者の中をメラニーが気丈に歩き回る姿から始まるから、アレレ・・・このシーンは、奴隷解放の是非を争点した南北戦争で南軍が崩壊する象徴的なシーンだが、これは一体ナニ?北軍の勝利とリンカーンの奴隷解放宣言(1863年)によって、たしかに奴隷制度はなくなったが、黒人差別そのものはどうなったの?この冒頭シーンはそんなスパイク・リー監督の問題意識から出発しているらしい。

また、本作中盤にはKKKの新入会員歓迎会で『國民の創生』(15年)が上映されるシーンが登場するが、それは一体なぜ?それは、この映画では、いまだに人々の記憶に残る南北戦争を背景に、奴隷解放問題、反抗的で強力な黒人の蜂起に対する白人の恐怖を描いているため、KKKはそれをみんなで確認することによって、「黒人をやつつけろ!」という戦闘意欲を高めるためらしい。

また本作では、ロンの会員証発行を巡って直接ロンと何度も電話のやり取りをした上で、ロンのKKKへの加入を許可したKKKの最高幹部デビッド・デューク(トファー・グレイス)が、まんまとロンの“潜入捜査”にはまってしまうストーリーがメチャ面白いが、KKKの中で、デビッドが「アメリカ・ファースト!」と連呼するシーンが妙に印象に残る。もちろん、これはトランプ大統領が唱えるキーワードだが、なぜそれがKKKのキーワードになっているの?さらに、本作ラストには逆さにされた星条旗が登場するが、それは一体なぜ?日露戦争における日本海海戦では、東郷平八郎司令長官率いる日本の連合艦隊は旗艦「三笠」のマストにZ旗を掲げたが、これは参謀秋山真之の起案による「皇国ノ興廃此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セヨ」の意味を持たせたものだ。それに対し、アメリカで逆さの星条旗を掲げるのは国家の緊急事態を表すものだから、本作のそんなラストにビックリ!

『マルコムX』でデンゼル・ワシントンを起用して剛速球で黒人問題にメスを入れたスパイク・リー監督が、本作では二代目のジョン・デヴィッド・ワシントンを起用して、カ

ーブともフォークとも考えられる明らかな変化球で現在の黒人問題にメスを入れているので、それに注目！やっぱりスパイク・リー監督作品は面白い！

2019（平成31）年4月3日記